



懸け橋

一步先のあなたへ

永田 和宏



6 師事するとは

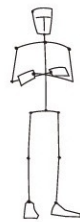
私は、人生の師と言いつても三人持っている。これは幸せなことである。ひとりには高校と塾で習った英語の先生。もうひとりには短歌の師であり、私の所属している短歌結社の主宰者であった。最後のひとは、私の所属した研究室の教授さん。

このラインナップはちょっと順当過ぎて恥しいくらいだが、それはさておき、生きてゆく上で師(先生)と仰げる存在、そこまで仰々しく言わなくとも、師と仰げる存在をひとりでも持てれば幸せである。三人というのはいかに贅沢か。

彼らは私の先生であると思っ

ていますが、実は、それら先生という存在から何かを教わったという記憶はほとんどない。もちろん英語の先生からは徹底的に英文法をたたき込まれ、おかげで、高校卒業時にはどんな英文でも、単語がわからない場合を除いては、読み取れない文章というのにはほとんどお目にかからなかった。確かに教わったことは多いのだが、そのことでその先生が師であるのかというと、それはちょっと違う気がする。

人生は出会いである。どの時期にどのような人物に出会うか、師と仰げる人に出会うかは、その人の人生に大きな影響をおよぼすだろう。そんな師に出会ってほしいと思う。しかし、師を得て幸せと思えるのは、教えを受けられる先生ができて得をしたなどという、損得勘定によるものではないだろう。



師を持つことができた、あるいは師と思える存在を持っていると実感できる、そのこと自体が幸せなのではないかと私は思うのだ。師から何か直接の利益供与を受けられるからというのではなく、片思いのように、師と思える存在を持つことができたと自分自身を、誇らかに思えることが幸せなのである。

師と仰げる存在を求める思いはあっている。しかし、それは探しに行き出会うという性質のものではない。この先生とあの先生を較べて、こちらの方が知識がありそうだから、こちらが面倒見が良さそうだから、あるいはこの人とお近づきになれば後々有利になりそうだからといった、得られる利益の大きさを扱はれるものではない。師を持つ幸せとは、こちらの側の精神の満足状態を言うのであって、その功利性で計れる

ものではないのである。出会いはたぶん偶然である。偶然ではあっても、その出会いが必然であったと後から思えるようになることが、師事ということの本質である。先生のほうは、この者の師になつてやろう、そのように努力しようなんて思わないし、弟子のほうもこの人なら師としてもいいかなどと値踏みはしない。優れているから師となるのではないのだ。

その人の側に師としての絶対的な資格があるのではないし、私の側に見る目があったからでもない。誰が見ても素晴らしい人がいたとしても、その人が「あなた」の師となるというものは、偉いと思うこと、師と思つたこととは別なのである。師と弟子との関係というのは、そのどちらかに理由があるのでなく、その組み合わせに意味があるのだろう。誰も知らないこの人の良さは、私だけが知っているというところに気がつく。それはすなわち二人の「あいだ」の意味に気がつくことでもある。

二つの存在の「あいだ」こそが自分にとって掛け替えのないものであると感じられるとき、その存在が師として立ち現われる。一方的に師と仰ぐのではなく、また師を所有するのではなく、その「あいだ」に自分しか見つけられない繋がりを実感すること、言い換えれば、その「あいだ」を所有すること、それが師事ということである。師を思うとき、その「あいだ」がほのほのしみじみと自分を包んでくれる幸せを感じるのである。

1947年、滋賀県生まれ。京都大理学部卒業。京大再生医科学研究所を経て、現在は京都産業大総合生命科学部教授。歌人で、短歌結社「塔」主宰。

人生でいつどんな人物と出会うか
 自分にしか見つけられない繋がりがり
 必然であったと後から思えること